

市民活動 10 年の振り返りと後継者育成への挑戦

大脇巧己（特定非営利活動法人さんぴいす）

はじめに

当法人は、平成 15 年 3 月に任意団体の「NPOさんぴいす」として誕生し、翌年（平成 16 年）の 9 月に法人認証を受け、特定非営利活動法人さんぴいす（以下、さんぴいすと記す）となった。

設立当初は事務所も持たず、メインとなるスタッフが本業の傍らでさんぴいすの活動もおこなっていた。

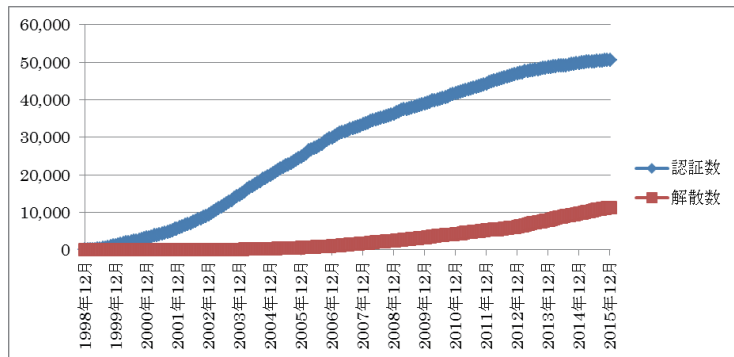


図1 国内のNPO法人の認証数と解散数（内閣府統計資料より）

本格的な事業開始は、法人認証の翌年の平成 18 年の 4 月に専従職員を 2 名置いてからになる。共生のひろばとのつながりは、芦屋市内の自然を活用した小中学生を対象とした体験型環境学習である「芦屋川探検隊」（現在は、アシレンジャーと名を変え継続実施中）の活動を学芸員の三橋先生にご協力頂いたことがきっかけであり、博物館との接点は子どもを対象とした生き物観察であるが、当法人の本来の事業は、次世代育成のための人材育成全般である。

共生のひろばが 10 年間継続して開催してきた結果、11 年目以降の開催については、多くの意見が出され、新たな試みのもと開催されたように、当法人もこの節目を機に、これまでの 10 年間の活動を振り返ると共に、この先、更なる 10 年をどのように活動していくべきかを考えたことをここにまとめてみた。

地域や団体との共生、多様性については、この 10 年で活動自体も多様化し、共生も生まれたと思う。しかし、10 年間の活動を当団体だけでなく、他団体の現状も含め客観的に見た時に、どうしても気になることが 1 つある。それは、どんなに有意義な活動や楽しい活動をおこなってきている団体にも、必ず訪れる共通の課題であり、いつかは答えを出さないといけない問題であり、活動が充実していればいるほど、その時には気づかない課題だと感じたので、これまでの共生のひろばでの発表趣旨とは少し違う視点ではあるが、活動の継続性より思うところを書かせてもらいたいと思う。

共生のひろばに参加する団体の多くは、任意団体であり、法人格を有していたとしても、その法人で専従職員を置くような団体は稀だと思うので、当法人のこれまでの活動が、全てそのまま活用頂けるとは思わないが、地域との協働や事業（または、事業とまで言わないまでも、それぞれの団体が行っている活動）を今後も継続していく際の参考程度にはなると思うので、そのつもりで一読頂ければ幸いである。

NPOの現状

日本のNPOは皆さんもご存じの通り、1995年に発生した阪神大震災の時に活躍した復興ボランティアの活動によりNPO活動が国民に認知され、その後制定された特定非営利活動推進法（通称：NPO法）によりNPO法人が生まれ、今日に至っている。昨年度、震災より20年が経過し、国内のNPO法人もその数を着実に増やしてきた。平成26年の12月にはついに累積認証数が5万法人を超え（図1）、その数は、国内の大手7社のコンビニエンスストアの店舗数とほぼ同じ数に達したと言われている。しかし、コンビニエンスストアは身近な場に多数点在することを自覚している、N

PO法人がこれと同じくらい存在することは、あまり意識にない。NPO活動をおこなっているのは法人格を持っている団体だけではないので、任意団体も加えれば、コンビニエンスストアの2倍の数では足りぬ可能性も十分ある。このため、NPO自体の認知度は高くなっているものの、NPOに対する正しい理解はあまり進まず、①NPOってボランティアのことじゃないんですか？ ②NPOって、儲けちゃいけないんじゃないんですか？ といった誤解が未だに多く残っている。

また、各団体が社会的に重要な役割を果たすユニークかつ独創的な活動をしているものの、それぞれの活動をおこなうだけに手いっぱい、事業を継続するために必要な経済的基盤の強化や人材の育成といった面にはなかなか注力出来ず、無償ボランティアや少額の有償アルバイトなどに頼る団体運営を余儀なくされているのが現状である。

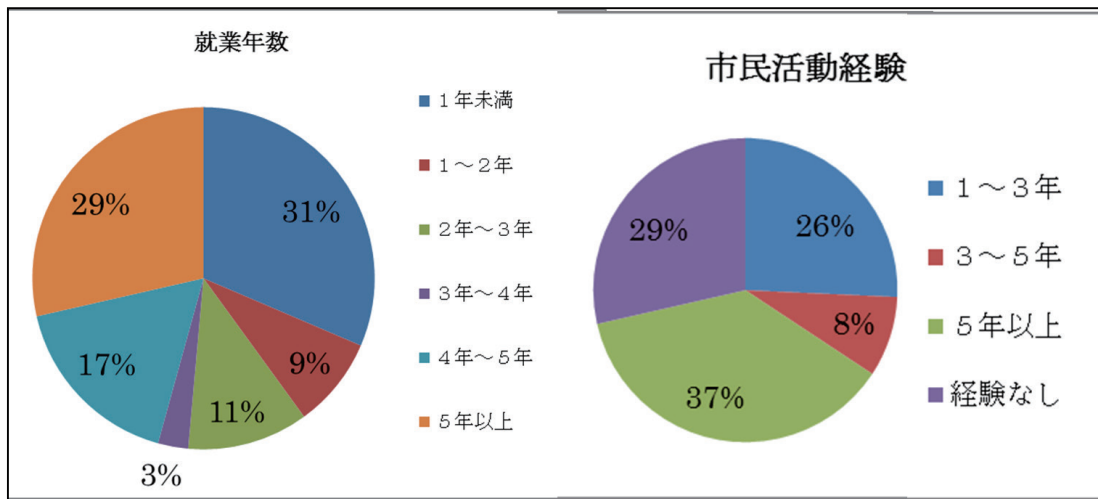


図2 中間支援センターの職員に対するアンケート 就業年数とこれまでの市民活動経験について

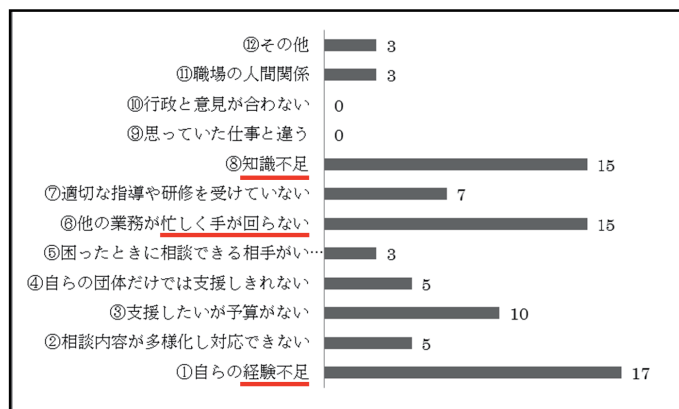


図3 中間支援センター職員が抱える問題点

さんびいすが 2012 年に阪神地域、播磨地域で活躍している中間支援センターのスタッフに対して実施したアンケート調査(図2、3)でも、地域のNPOを支援するスタッフ自体が自らの経験不足や知識不足、本来しなければならぬ仕事以外の業務が忙しく、中間支援業務に専念できないといった問題点を挙げている。

この結果は、単にスタッフの経験不足と言うだけでなく、実はその組織の後継者育成とも大きくかかわるものである。実は法人格の有無に限らず、活動の継続に大切な後継者が多くのNPOで育成できていないことのあらわれでもある。

兵庫県におけるNPO法人に関わる人々にこんな呼び方があるのをご存じだろうか。第一世代、第二世代、第三世代……。さんびいすは、震災後9年目の2004年に法人認証を受けた第三世代のNPOであり、表1にあるように震災以前よりNPO活動をおこない、NPO法設立にも注力したリーダー達を第一世代。その第一世代のリーダーの元で、活動を続けてきたスタッフや職員を第二世代と呼ぶ。

現在、多くの第一世代のリーダー達が引退もしくは、次のリーダーへと世代交代の時期を迎えているが、多くの第二世代のスタッフは、第一世代のリーダーと同年代の事が多く、後継者不足に悩まされているのが現状である。そして、第三世代の我々も次の10年が経過するまでの間に、同じように後継者をどうするかといった問題に直面するのは間違いないことである。

	第一世代	第二世代	第三世代
時期	阪神大震災直後～	NPO法成立後～	震災後、10年前後
担い手・設立経緯	行政職員（非常勤、臨時職員含む）や元職員、大学教授など有識者などが中心にNPO多い	ボランティア経験を持つ市民が、第一世代のリーダーの元でNPO活動に従事	幅広いキャリアを持つ人同じが課題解決の新たな形態としてNPOを選び活動を開始
活動の特長	国や県、市など行政との調整や法整備。 NPOの認知度、地位向上など。	ボランティアや職員として、NPO活動に従事してきた。 弱者や被害者の支援や、中間支援など。	活動内容も様々。 起業スタイルの一つとして選ぶ場合も。

表1 兵庫県におけるNPOに携わる人々の世代別特長

さんぴいすのこれまでの10年の活動や現在に至る経緯については、下記にデータを置くので興味がある方は、確認ください。 <http://sanps.com/pfd/20160211sanps.pdf>

共生と多様性を維持するために

さんぴいすは、第2回の共生のひろばから参加しているが、この間、新しい団体も多く参加してくれているし、各団体の活動も当初よりも多岐にわたってきている気がする。しかし、その一方で常連として毎回共生のひろばに参加されている団体の皆さんの多くが、私たちより年配の上に、その当時より10歳年を取った。活動より10年が経過した我々も、次の10年を考える時、今は我々が中心となり様々な活動を続けているが、我々が活動を止めてしまった途端に、これまで積み重ねてきた活動も止まることに気付いた。生き物の営みからすれば、そこで種が途絶えるのと実は同じことではなかろうか。生き物の世界でもは、種が途絶えるのと同時に新たな種が生まれる。

NPO活動も同じでひとつの活動団体が活動を止めたとして、第四、第五世代といった新たな活動を始める人が現れる可能性もあるだろうが、もし、種が絶える事を望んでいないのであれば、他の生き物のように、環境に任せるだけでなく、環境を変え継続できる方法を考えるのが我々人である。

NPOの活動は、どれも意義を持った重要なものが多いので、活動をおこなっている最中はその活動を行うことに重きを置きすぎる傾向があり、そのため、共生のための情報発信やネットワーク化といった活動を継続するために大切なことが、活動に関わる狭い範囲の人にとのみとなってしまうことが多々ある。これが、実は20年近い歴史を持ち、数・種類共に多様化してきたNPOが、未だに市民に正しく理解されていない現状を生み出しているのだと言える。

次の10年への課題

今、活動が充実している時だからこそ、これからの10年に向けた準備が必要になる。そこでさんぴいすでは、以下2つの課題にこれから取り組んでいく。

- 1) 拡散から集約 2) 後継者育成

1) 拡散から集約 に関しては、これまでの10年間に続けてきた活動を取捨選択し、学校教育ならびに包括的な人材育成事業をさんぴいすから独立させる為、平成27年7月にNPO法人アクティブ・ラーニング・アソシエーション（ALA）を設立した。これにより、活動に対する適正な対価を得られる仕組みを生み出し、今後、我々と共に活動をしたいと願う若者の雇用も可能な経済力を目指す。

その上で、2) 後継者育成 をさんぴいすとして進める。これまでさんぴいすでも、他のNPO同様活動に興味を持つ学生をボランティアとして受け入れ、様々な事業のお手伝いをしてもらったが、ボランティアの募集だと応募する学生自体にも「お手伝い」として指示された事だけを着実にこなせば良いとの考えが先立ち、受動的な経験しか身に付かないことが多い。そこで、互いの関係をよりWin・Winとするために、ボランティアからインターンシップ（表2）へと学生の受入れを変え、より能動的な体験から経験を積んでもらうことにより、NPO活動に対する理解を深めた学生達を育てていきたいと考えている。

募集内容	インターンを経験したい学生（大学、短大、専門学校、大学院生）
期間	1stクール 平成28年3月～6月 ※希望者は、2ndクール（7～10月）以降も継続可能です
事業内容	芦屋市内でおこなうイベントや教育関連の事業の企画、広報、運営など 1stクールでは、芦屋バルの実施、市内の学生教育ボランティアの立ち上げ準備、2ndクール以降のインターンシップ受入れ時に行う講座の企画などのお手伝いをしてもらう予定です。
身に付けるもの	コミュニケーション力、マネジメント力、コーディネート力など 社会人として身に付けておきたい大切な力を育て、行政職員や経営者など、学内では出会えない人脈づくりにも役立ちます。 ※NPO法人アクティブ・ラーニング・アソシエーションが実施する「社会人基礎力（経産省）」の12要素が身に付く研修も実施します

表2 さんぴいすがおこなうインターンシップ

これにより、NPOに携わる多くの人々の共通課題である下記の項目の改善を続けていきたいと考えている。

ベテラン → プロフェッショナル
 お手伝い → 人材育成
 個の活動 → ネットワーク
 時代の変化に柔軟に適応

ダイヤモンドが、ダイヤモンドでしか研磨できないように、人は人の中でしか磨かれない。我々は、これからの新たな10年、次世代の後継者の種を蒔き続け、蒔いた種が芽を出すことができる「場」や「環境」を今後も守り続けていきたいと思っている。